様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ６ 月 １７ 日現在

機関番号：１３８０２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2019
課題番号：１５Ｋ１１４６７

研究課題名（和文）コンピテンシー・モデルに基づく看護職者のための倫理学習プログラムの開発と評価

研究課題名（英文）Development and evaluation of an ethics learning program for nurses based on competency model

研究代表者
片山　はるみ（Katayama, Harumi）

浜松医科大学・医学部・教授

研究者番号：９０４１２３４５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,000,000円

研究成果の概要（和文）：看護実践における倫理的ケアのコンピテンシーを明らかにし、評価尺度の原案を作成した。看護実践における倫理的課題への取り組みに関するハイパフォーマーとして職場の長から推薦が得られた看護職者または高度実践看護師15名を対象に行動結果面接を行った。903分の録音データを質的記述的に分析したところ、498コードの看護師の体験が類似性と相違性の比較検討を経て抽象化され、22サブカテゴリ、4カテゴリが抽出された。22サブカテゴリを用いて評価票の原案を作成した。その後難易度を設けた評価票を作成し、開発した学習プログラムの効果を検証中である。

研究成果の学術的意義や社会的意義
看護職者の倫理的問題な実践力を向上させるための学習プログラムの開発は、多忙な看護現場において効果的・効率的に教育ニーズを満たし、看護ケアの質の向上に多いに寄与する。また、看護職者が積極的に倫理的問題に取り組む能力を強化することは多職種協働のチーム医療の推進にも寄与するものである。また、これまで曖昧であった看護職者の倫理的な実践力の具体的な内容が行動レベルで明らかとなることは、看護職者が自らの目標管理に活用できるだけではなく、看護職者の仕事に関する社会への説明責任の一端も担える。

研究成果の概要（英文）：The authors clarified the competencies of ethical care in nursing practice and created a draft evaluation scale. The Behavioral Event Interview was conducted with 15 nurses who were certified nurse specialist or highly experienced nurses nominated by the head of their workplace as high performers regarding efforts towards ethical issues in practical nursing. A total of 903 minutes of recorded interview data were analyzed qualitatively and descriptively, and 498 codes describing nurses’ experiences were abstracted through comparative examination of similarity and dissimilarity, and 22 subcategories and four categories were extracted. A draft evaluation scale was developed using 22 competencies.After that, we have created an evaluation sheet with a difficulty level and are verifying the effects of the developed learning program.

研究分野：看護倫理学

キーワード：看護倫理　学習プログラム　コンピテンシー　評価票

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

医療技術の進歩や人々の権利意識の高まり、また価値観の多様化などの社会環境の変化により、看護職者は様々な倫理的問題に直面するようになっている。小川ら（2014）が挙げた 35 項目の「臨床看護師が体験している倫理的問題」に示されるように、我が国の看護職者が体験している倫理的問題は多岐にわたる。中でも身体拘束や胃瘻等の人工栄養の是非にかかわる議論は、医学的判断と対象者の尊厳を守ることとの板挟みになっている看護職者にとって、広く先進国における共通の課題であると同時に、日常的な問題でもある。ところが、多忙を極める日常業務の中では倫理的問題を十分に検討したり、実践力を向上させたりする余裕は少なく、「患者の関わりへの自責の念」、「主体的な問題関与からの回避的志向」、「考えの違うものや現状にもつ否定的な感情」、などの状況（村田、2012）に陥って悩む看護職者も多い。また、“道徳的感受性”が高い臨床看護師は疲労が強い（米沢、2013）という報告もある。

看護職者の倫理的な実践力がケアの質を左右すると言われている現在、個々の倫理的実践力を高めるための倫理教育や、倫理的課題に取り組める、あるいは悩んでいるスタッフを支援するような組織風土の醸成が課題となっている（長谷川、2014）。またチーム医療が重要視（厚生労働省、2010）されていることからは、多職種協働の現場で看護の立場から積極的に発言し、倫理的な問題を協議できる能力も必要となってくる。これらのことから、エビデンスに基づいた看護倫理に関する現任教育プログラムを作成・評価・運用することは喫緊の課題であった。

国内外では看護職者のために様々な倫理教育が行われているが、エビデンスに基づいた学習プログラムは極めて少ない。なぜなら、生命倫理学や看護倫理がまだ新しい学問領域であるだけでなく、看護職者等医療・福祉従事者の倫理的能力を評価するためのツール自体、我が国では信頼性・妥当性が検証されているのは「日本語版道徳的感受性尺度（前田、2012）」と「看護師の倫理的行動尺度」（大出、2014）などの若干数のみであり、その開発は緒についたばかりであった。したがって、どのような方法にどのような効果があるのか、また段階的な組み立てはどのようにすべきかについては、明らかではなかった。

２．研究の目的

本研究の目的は、エビデンスが確かで評価システムと一体となっている、倫理的コンピテンシー・モデルに基づいた、また学習者のニーズにも沿った、看護職者のための倫理学習プログラムを開発、実行、評価することであった。看護職者の倫理的問題に対する実践力が向上することは、看護ケアの質の向上につながるだけではなく、多職種協働のチーム医療の推進にも寄与する。また、これまで曖昧であった看護職者の倫理的な実践力の具体的な内容を行動レベルで明確に示すことも可能となる。

３．研究の方法

本研究では、エビデンスが確かで評価システムと一体となっている、倫理的コンピテンシー・モデルに基づいた、また学習者のニーズにも沿った、看護職者のための学習プログラムを開発、実行、評価した。

研究１：ハイパフォーマー看護職者へのインタビュー調査を行い、質的内容分析によって看護職者の倫理的コンピテンシー・モデル原案を作成した。

研究２：作成したコンピテンシー・モデル原案をデルファイ法によって精選し、学習者のニーズ調査等も加味して看護職者のための倫理学習プログラムを開発した。

研究３：学習プログラムを実行・評価しつつ、プログラムの学習効果とコンピテンシー・モデルの評価票としての信頼性・妥当性、有用性を統計学的に検証した。

＜平成 27・28 年度＞

研究１：看護職者の倫理的コンピテンシー・モデル原案の作成

対象：職場の上司によってハイパフォーマーと評価される看護職者 20-30 名程度とする。応募者が所属する大学附属病院を中心に、同市内にある医療・福祉機関に協力を得る。

方法：

1)　インタビュー調査

行動結果面接（Behavioral Event Interview, BEI）(Spencer, 1993)に倣い、30-40 分程度のインタビューを行った。対象者に職務における３つの際立った成功と３つの失敗体験を短い物語として語ってもらった。面接者はカウンセリングのトレーニングを積んだ者とし、なぜそのような状況が生じたのか、誰がその状況に関わっていたのか、あなた自身はその状況に対応するに当たって、何を考え、感じ、何を達成したいと思っていたのか、実際にどのような行動をとったのか、どのようなことが起こったのか、その結果はどうであったか、等の質問によってデータを得た。

2)　質的内容分析

Krippendorff (1989)の手法を参考にし、「調査で得られた記述的データをもとに記録単位で分析し、分類・命名することによって事象を客観的に明らかにする」内容分析（上野、2008）を行った。インタビュー・データをテキスト化した後、分析する単位を決定し、記述の分類の後、分類された集合体のネーミングをし、複数の研究者による一致率を算出して信頼性を確保した。

3)　看護職者の倫理的コンピテンシー・モデル原案を作成した

分類された集合体をさらにレベルごとに整理し、Spencer らが示したコンピテンシー・ディクショナリーなどを手掛かりにコンピテンシー・モデル原案を作成した。

＜平成 29 年度＞
研究２：看護職者のための倫理学習プログラムの開発
対象：看護倫理の現任教育を担当している国内の中規模以上の病院等の看護管理者とした。
方法：
4)　コンピテンシー・モデルの項目を精選した
　看護倫理の現任教育を担当している看護管理者を専門家グループと定義し、Norman ら（1963）によって開発されたデルファイ法により、コンピテンシー・モデル原案の項目を精選した。
5)　看護職者の倫理に関する学習上のニーズを明らかにした
　4)と併せて看護倫理に関する看護職者の学習上のニーズを選択式質問項目や自由記述等で調査し、質的内容分析を用いて分類・整理することにより、実践にあたっている、もしくは看護管理者が考える看護職者の倫理に関する学習上のニーズを明らかにした。
6)　　看護職者のための倫理学習プログラムを開発する
　4)で作成したコンピテンシー・モデルと 5)で明らかにした学習上のニーズを基にして「コンピテンシーに基づく看護職者のための倫理学習プログラム」（仮）を開発した。

＜平成 30・令和１年度＞
研究３：看護職者のための倫理学習プログラムの実行・評価
対象：実践にあたっている看護職者およそ 1000 名の協力を得た。応募者が所属する大学附属病院を中心に、同市内にある医療・福祉機関に協力を得た。
方法：
7)　学習プログラムを実行した
　１施設の看護部の協力を得、現任教育の担当者と共に学習プログラムをラダー毎に数回実施した。概ね３つのラダーそれぞれに、３回シリーズのプログラムを作成した。
8)　学習プログラムの効果を評価した
　作成した看護職者の倫理的コンピテンシー・モデルを用いてプログラム実施の前後並びに持続性の３点を測定し、学習プログラムの効果を評価した。
9)　看護職者の倫理的コンピテンシー・モデルの評価票としての信頼性・妥当性を検証した
　8)のデータを用いて、作成したコンピテンシー・モデルの評価表としての信頼性・妥当性、有用性を統計学的に検証し、学習プログラムと評価の包括的なシステムを完成させた。

４．研究成果
　看護実践における倫理的ケアのコンピテンシーを明らかにし、評価尺度の原案を作成した。看護実践における倫理的課題への取り組みに関するハイパフォーマーとして職場の長から推薦が得られた看護職者または高度実践看護師 15 名を対象に行動結果面接を行った。903 分の録音データを質的記述的に分析したところ、498 コードの看護師の体験が類似性と相違性の比較検討を経て抽象化され、22 サブカテゴリ、4 カテゴリが抽出された。カテゴリは【善いケアに関する感性・価値を表現する】【より善いケアとは何かを考えながら行為する】【より善いケアを提供するために間接効果をもたらす】【より善いケアの学習に向けて行動する】であった。22 サブカテゴリをスペンサー・コンピテンシー・ディクショナリーと照合することによってコンピテンシーとして用いることの論理的妥当性を確認し、これを用いて評価票の原案を作成した。その後難易度を設けた評価票を作成して統計学的に検証した。開発した学習プログラムの効果を検証中である。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計0件

〔学会発表〕　計2件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 片山はるみ
２．発表標題 看護実践における倫理的コンピテンシーの抽出
３．学会等名 第22回日本看護管理学会
４．発表年 2018年

１．発表者名 片山はるみ
２．発表標題 倫理的ケアのコンピテンシーの統計学的検証（第1報）―ラダーの構成可能性の検証―
３．学会等名 第12回日本看護倫理学会
４．発表年 2019年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	森下　直貴 (Morishita Noki) (70200409)	浜松医科大学・医学部・名誉教授 (13802)	
研究分担者	村松　妙子 (Muramatsu Taeko) (90402255)	浜松医科大学・医学部・助教 (13802)	